中英語ロマンスにおける異教徒の改宗と信仰の証明*

趙　　泰昊

キーワード：サラセン、Conversion、中英語ロマンス、*Otuel and Roland*、*Le Morte Darthur*

0．はじめに

中世ヨーロッパ世界において宗教は人間集団を区分する上で最も重要な基準であり、[1] 聖人伝や騎士道ロマンスなどの文学作品のなかではしばしば信仰上の違いが肌の色や身体的な特徴によって可視化されている。[2] こうした信仰と身体の結びつきをめぐる想像力を示す例として、14世紀に書かれたとされる中英語ロマンス『ターズの王』*King of Tars* の中では、洗礼を受けると同時に肌の色が黒から白へと変化する異教徒の様子が描かれている。

> Þe Cristen prest hiȝt Cleophas;
> He cleped þe soudan of Damas
> After his owhen name.
> *His hide, þat blac & loþely was,*
> *Al white bicom*, þurth Godes gras,
> & clere wiþouten blame.
> & when þe soundan seye þat siȝt
> Þan leued he wele on God almiȝt;
> His care went to game. (*King of Tars* 925–33, my emphasis)[3]

キリスト教徒になることを決意した異教徒のサルタンが洗礼を受ける様子を描いたこの場面で、彼の黒く醜い肌は「神の恩寵によって（'þurth Godes gras'）」白く変化している。このサルタンの変身は、Norman Daniel が論じたように、中世の物語が異教徒の「改宗（Conversion）」を「決定的な瞬間の出来事」として描いた典型例の一つとして理解すること

---

* 本稿は日本英文学会第93回全国大会（2021年５月23日、オンライン開催）において発表した内容を大幅に発展させたものである。また本研究は JSPS 科研費20K12960の助成を受けたものである。

[1] Geraldine Heng, *The Invention of Race in the European Middle Ages* (Cambridge: Cambridge UP, 2018), p. 27.

[2] 例えばキリスト教徒によって書かれた物語において、異教徒の黒い肌は魂の堕落を示すものとして語られることになる。Debra Higgs Strickland, *Saracens, Demons, and Jews: Making Monsters in Medieval Art* (Princeton, NJ: Princeton UP, 2003), p. 169.

[3] *The King of Tars: Edited from the Auchinleck Manuscript, Advocates 19.2.1*, ed. by J. Perryman (Heidelberg: Winter, 1980).

ができるかもしれない。[4]

一方で、中英語ロマンスにおいて描かれる異教徒の改宗を注意深く観察すると、物語中の宗教的他者の同化は簡単には実現していないことがわかる。『ターズの王』のように神の奇跡が示された場合にも、キリスト教への改宗を決意した異教徒は、その信仰の真正さを証明することを求められるのである。本論考では主に中英語ロマンスに登場する「サラセン」と呼ばれる異教徒の改宗を分析し、宗教的アイデンティティが中世においてどのように想像されていたかを考察する。Siobhain Bly Calkin が指摘するように物語の描写と現実の教義を完全に同一視することはできないものの、[5] 物語が描く異教徒による改宗とその後のキリスト教世界への同化の過程は、中世の西洋キリスト教世界における信仰の証明をめぐる問題の一端を示してくれる。サラセンの騎士がキリスト教共同体へと加わる際に直面する問題は、中世において宗教的アイデンティティの変更や証明が極めて困難なものであり、改宗者が洗礼後にも常に疑いの目に晒されていたという事実を示唆してくれる。信仰の証明にかかわる困難を踏まえ Conversion という現象について再度分析を試みることで、本論考は中英語ロマンスに描かれる「異教徒の改宗」の意義を再検討することを目標とする。

１．中英語ロマンスにおけるサラセンの表象：怪物的他者と有徳の異教徒

俗語で書かれた文学作品のうち、イングランドにおいても人気を博した中英語ロマンス（Middle English Romances）や古仏語の武勲詩（Chansons de Geste）の中では、キリスト教徒と敵対する異教徒は通常、イスラム教徒を表す「サラセン」という呼称のもと描かれている。この用語の選択は、11世紀から長期にわたって繰り広げられた十字軍の影響を反映している一方で、物語における「サラセン」は東方に住むイスラム教徒に限らず、しばしばキリスト教徒とは異質の存在を広く指すものとしても用いられることがあった。[6] キリスト教世界における「他者性」を体現するものとして、物語や絵画などの美術作品に登場するサラセンは、伝統的に悪魔と結びついた邪悪な存在として表現されている。サラセンをキリスト教徒と区別する最大の基準である「キリスト以外の神を信じる」という彼らの信仰における態度は、キリスト教徒にとって彼らの魂の堕落を表すものでもあった。こうした内的な性質を反映するように、サラセンの姿は通常キリスト教徒とは完全に異なるものとして想像され

---

[4] Norman Daniel, *Heroes and Saracens: An Interpretation of the 'Chansons de Geste'* (Edinburgh: University of Edinburgh Press, 1984), p. 179: 'The reasons that poets give for a Saracen to become Christian look pretty thin, morally and intellectually. They are much more interested in conversion as an event in the course of the story, than in any religious justification. [⋯]. It is often the matter of a moment, between two lines of verse, with loyalties reversed in the blink of an eyelid, as if it had never been otherwise'.

[5] Siobhain Bly Calkin, 'Romance Baptisms and Theological Contexts in *The King of Tars* and *Sir Ferumbras*', in *Medieval Romance, Medieval Contexts*, ed. by Rhiannon Purdie and Michael Cichon (Cambridge: Brewer, 2011), pp. 105–20.

[6] *MED* s.v. 'Sarasin(e', meanings (a), (b), (c), and (e): '(a) A Turk; also, an Arab; also, a Moslem; -- often with ref. to the Crusades; ~ hed, the head of a Saracen; (b) a heathen, pagan; an infidel; (c) as a type of non-Christian [⋯] (e) one of the pagan invaders of England, esp. a Dane or Saxon'.

ている。典型的には、彼らの信仰は多神教、偶像崇拝、一夫多妻など、キリスト教的な規範から逸脱した特徴によって彩られており、その姿は人間離れした動物的イメージでもって描き出されている。[7] このように現実と乖離した、イスラム教徒の歪曲された描写は、キリスト教徒の知識不足によって生じた表象伝統というよりもむしろ、この敵対する他者をキリスト教世界の中に位置づけ理解するための試みであったと考えることができる。[8] イスラム教徒を「怪物的な他者」として表す際に伝統的に用いられていたこうした表象は、キリスト教徒自身のアイデンティティの形成を容易にするための指標として機能していたと考えられるのである。[9]

また、Susan Conklin Akbari が指摘するように、サラセンは「宗教的にだけではなく、人種的にも異なる存在」として想像されていた。[10] 異教徒とキリスト教徒との差異は肌の色などの人種的・身体的な特徴をもって表現され、典型的にはキリスト教徒の肌は白く、サラセンの肌は黒く醜悪なものとして描かれている。14世紀の中英語ロマンス『ターズの王』においても、キリスト教徒の娘であるターズの王女の肌は「白鳥の羽のように白く（'As white as feþer of swan' 12）」美しいものとして描写されている一方で、彼女との結婚を求めるサラセンの首長の姿は「黒く醜いもの（'blac & loþely' 928）」として対照的に描き出されている。異なる宗教間の交流や対立を描いたこの物語において、信仰によって区別されたコミュニティの代表であるこの二人の人物が白と黒の肌を持つ存在として対照的に描き出されている事実は、宗教的アイデンティティが「身体的特徴」という人種的な表象によって明確に区分されていることを示している。更に宗教と人種的アイデンティティの結びつきを示すかのように、物語においては異なる集団同士の結婚を異人種間結婚（miscegenation）とみなし、これを避けようとする様子が描かれている。『ターズの王』ではキリスト教徒だけでなく、サラセンの側からも異なる宗教の信徒同士の結婚が忌み嫌われていることが示されている。

Wel loþe war a Cristen man
To wedde an heþen woman
Þat leued on fals lawe;
Als loþ was þat Soudan
To wed a Cristen woman,
As y finde in mi sawe.
(*King of Tars* 409–14)

異なる信仰を持つ宗教的他者との婚姻は「忌まわしいもの（'loþe'）」として描かれ、宗教的

[7] Strickland, pp. 157–92.

[8] John V. Tolan, *Saracens: Islam in the Medieval European Imagination* (New York: Columbia UP, 2002), p. 3. 'When Christians encountered Muslims, they tried to fit them into one of [the categories of religious other], "ignoring or distorting" those "uncomfortable facts" that did not fit the preestablished schema'.

[9] Jeffrey Jerome Cohen, *Of Giants: Sex, Monsters, and the Middle Ages* (Minneapolis: Minnesota University Press, 2000), pp. 132–33.

[10] Suzanne Conklin Akbari, *Idols in the East: European Representations of Islam and the Orient, 1100–1450* (Ithaca, NY: Cornell UP, 2009), p. 155.

アイデンティティによる人間集団の明確な区別が行われていることがわかる。物語に登場するサラセンは、西ヨーロッパのキリスト教世界の「外部に存在する他者」として、信仰だけではなく人種においても明確に異なるものとして描かれており、キリスト教徒は彼らとの違いを通して自らの規範を定義することができたのである。

一方で、本論考の主な分析対象となる「異教徒の改宗」を扱う中世の物語において、後にキリスト教へと改宗するサラセンの騎士や高貴な身分の女性たちは、信仰を除いてはキリスト教徒と区別することができない、美しい外見や美徳を備えた人物として描かれることがあった。例えば『ロランの歌』*La Chanson de Roland* の中に登場するサラセンの首長（Amiraflе）は美しい外見とその勇猛な性質が強調されており、「彼がもしキリスト教徒であったならば（'Fust chrestïens' 899）」とその性質を賞賛されている。[11] この一節はまた、優れた異教徒の改宗が期待されるべきものであったことを示唆している。こうした人物は信仰が異なる異教徒であるにも関わらず、まるでキリスト教徒のような美しい外見と白い肌の持ち主として描かれており、後にキリスト教の宗教共同体に同化するという理由から、受け入れやすい姿として提示されている。[12] 先に見た、黒い肌のサルタンの改宗が神の奇跡を示したのと同様に、こうした美しい異教徒の同化もまた、キリスト教の信仰の優位を示すものとして理解されるのである。

一方で、怪物的なサラセンが中世キリスト教世界において典型的な宗教的他者として機能していたのとは対照的に、キリスト教徒との区別が困難な「有徳の異教徒」の存在は、正しいキリスト教徒と道を踏み外した異教徒の違いを曖昧なものにしてしまう危険性を孕むものでもある。こうした自己と他者を区別する困難さは、十字軍遠征などにおけるイスラム教徒との直接の交流の経験に加えて、中世ヨーロッパ世界において信仰や風習の違いを外見上の特徴からのみ区別するのは容易なことではなかったという事情を反映していると考えられる。同時に、外見上の違いを頼りとした信仰の確認が困難であるという事実は、宗教的なアイデンティティは特定の言動によって常に証明される必要があったということを示唆している。物語において身体的な特徴と結びつくことで自明のものであると想像されていた宗教上の区分が、実際には極めて確認の困難な性質を持ち、そのために改宗者は常に疑いの目に晒されることになる。続くセクションでは新たにキリスト教共同体に加わった改宗者が、自らの信仰心を証明するため、不断の努力を求められていたという事実を確認する。

２．宗教アイデンティティの証明と改宗者への疑い

中世における「人種」という概念の発達を論じた研究がしばしば指摘するように、文学作品における描写とは裏腹に、中世ヨーロッパ世界において、異なる人々のグループを身体的な特徴によって区別することは困難であり、それらの属性と結び付けられていた宗教的アイデンティティもまた、外見によってのみ判別することのできないものであった。[13] 例えば1215年の第四回ラテラノ公会議においてキリスト教世界に住むユダヤ教徒やイスラム教徒は

[11] Ian Short, ed. and trans., *La Chanson de Roland*, Lettres gothiques (Paris: Livre de poche, 1990).

[12] Jacqueline de Weever, *Sheba's Daughters: Whitening and Demonizing the Saracen Woman in Medieval French Epic* (New York: Routledge, 1998).

「非キリスト教徒であること」を示す特別な装飾品の着用を義務付けられており（第68条）、イングランドでは他のヨーロッパ地域に先駆けて1218年にこの条令が実施されている。[14] この例は、こうした特別の措置なしには異教徒とキリスト教の信徒を区分することが困難であったという事実を示している。内的なものであるはずの個人の信仰は、現実世界における判別の困難さのため、特定の行動によって証明されるべきものとして理解されているのである。同様に、同じラテラノ公会議において、キリスト教徒自身も年に一回の所轄司祭への「罪の告白」と、罪に応じて課された「罪の償い」を果たすことが義務付けられている。キリスト教徒の信仰生活もまた、真摯な悔恨を自身の言動によって示し、罪を償うという行為に基づいたものであったと理解することができる。

信仰の証明をめぐるこうした事情を反映するように、文学作品においては、宗教的なアイデンティティの持つパフォーマティブな性質を逆手にとるような様子が描かれることがある。興味深いことに、身体的特徴によって信仰の違いが明確に示されていたような『ターズの王』でもまた、宗教的アイデンティティのパフォーマティブな側面が描き出されている。物語において、サルタンに嫁ぐこととなったキリスト教徒の王女は、結婚に先立ち信仰の棄却を命じられる。他のキリスト教徒の安全を守るため王女は、信仰心はそのままに、自らの言動によってサラセンの一員になったかのように振る舞っている。

> Sche kist Mahoun & Apolin,
> Astirot, & sir Iouin,
> For dred of wordes awe.
> & while sche was in þe temple
> Of teruagant & Iubiter
> Sche lerd þe heþen lawe.
> (*King of Tars* 499–504)

ここでキリスト教徒の王女は偶像の崇拝や彼らの教義を学ぶという偽装行為を通して、実際の信仰を棄てることなく自らの宗教アイデンティティを「サラセン」として示している。[15] こうした物語における描写は、内的な信仰が言動によって示されるべきものとして理解されていたことを示唆するものであり、同時に、信仰における真摯さの証明は極めて困難だったことを暗示している。

---

[13] Robert Bartlett, *The Making of Europe: Conquest, Colonization and Cultural Change 950–1350* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1993), p. 197; Benjamin Isaac, Joseph Ziegler, and Miriam Eliav-Feldon, "Introduction," in *The Origins of Racism in the West*, ed. Miriam Eliav-Feldon, Benjamin Isaac, and Joseph Ziegler (Cambridge: Cambridge UP, 2009), pp. 1–31 (p. 18).

[14] Heng, pp. 75–76.

[15] 他にもシャルルマーニュによるスペイン遠征を主題とする中英語ロマンスのひとつ *Firumbras* では、キリスト教徒の騎士の一人である Richard が、橋を守るサラセンの巨人に向かって自らの身分をサラセンの商人として偽る場面がある。Richard は異教徒の神の名を唱え（'To honour oure mahound and oure mamotrye' 1270）、商人として身分を偽っている（1263–72）。*Firumbras in Firumbras and Otuel and Roland*, ed. by Mary Isabelle O'Sullivan, EETS o.s. 198 (London: Oxford UP, 1935).

信仰の違いが身体的な特徴によって明確に示されているように見える物語においても区別が困難な異教徒の存在すること、また、改宗をしていない状態にあっても特定の言動によって他者になりすますパッシング（Passing）が可能であるという事実は、改宗を決意した個人の信仰の確認において極めて重大な問題となる。なぜならば、キリスト教徒である王女が自らの振る舞いによって改宗を偽証したように、美しい外見をしたサラセンもまた、特定の言動によってキリスト教徒になりすますことができるという事実を示唆しているからである。こうした理由から、『ロランの歌』において示された「キリスト教徒であったならば」という単純化された構図とは裏腹に、信仰以外はキリスト教徒と変わるところのないような有徳の異教徒による改宗においてもその信仰の証明は一筋縄ではいかない。キリスト教徒と同質に見える異教徒であっても、その生まれ持った異教徒としての性質によって、完全なキリスト教徒への同化は困難を伴うものとして描かれているのである。このため「曖昧な他者」である改宗者は、自らの言動によって自己と他者の違いを明確なものとする「差異化・他者化」のプロセスに積極的に参与することが求められるのである。

上述の通り、宗教的なアイデンティティの証明が常に困難を伴うものだとすれば、一方の宗教から他方への移行である「改宗」は容易なものではないということになる。中世における異教徒の改宗に対するキリスト教徒の態度を象徴的に示してくれるのは、イングランドを含む中世ヨーロッパにおけるユダヤ人への態度である。イスラムの台頭に先立ち、キリスト教世界においては長くユダヤ人が典型的な他者として偏見の対象となっており、ユダヤ人は独特の匂い、男性の月経や青ざめた（あるいは黒い）顔色などの身体的特徴によって、キリスト教徒とは明確に異なる存在として表現されていた。[16] ユダヤ人を敵視する伝統は長く、13世紀末のイングランドにおいてもユダヤ人は追放の対象となっている。その一方で、キリストの教えを伝え広めるという目的のため、こうしたユダヤ人をキリスト教に改宗し、同化しようという試みも当然存在していた。イングランドにおいては、改宗を決意したユダヤ人がキリスト教徒として生きることができる場として Henry III が1232年に設立した *Domus Conversorum* が、そうした試みの一つとして見なすことができる。[17] こうした試みは他者をキリスト教化するため国王が主導する企画であるという点で特筆すべきものであるものの、現実におけるユダヤ人の同化は、物語に描かれるサラセンの改宗と同種の問題、すなわち「新たに改宗する異教徒の信仰に対する疑い」という問題を引き起こすことになる。

かつてのユダヤ人がもとのアイデンティティを完全に捨て去り、キリスト教徒として受け入れられたわけではないという事実を端的に示すのは、彼らを呼び表す呼称である。キリスト教へと改宗した個人は、例えば 'Martin the Convert' のように「改宗者」というタイトルとともに名を示され、かつてはユダヤ人だったというスティグマを背負うことになったと Stacy は指摘している。[18] 彼らが持つユダヤ人としての性質がキリスト教への改宗後も消え

[16] Strickland, pp. 95–155.

[17] Heng, pp. 75–76.

[18] Robert C. Stacy, 'The Conversion of Jews to Christianity in Thirteenth-Century England', *Speculum* 67 (1992) 263–82 (278): qtd. by Heng, *The Invention of Race*, p. 77: 'Through baptism, converts from Judaism became Christians, but this did not mean that they had entirely ceased to be Jews in the eyes of their brothers and sisters in Christ.'

ずに残っているという想像がその根底にはあると考えられるのである。

同様の想像力を示す興味深い例として、教皇イノケンティウス２世の政敵であり、「ユダヤ人教皇」とも呼ばれた教皇候補アナクレトゥス２世の例をあげることができる。アナクレトゥスの曾祖父はキリスト教に改宗したユダヤ人であり、この事実が彼と敵対する人物たちに、彼を非難する口実を与えている。改宗から４世代後も依然として「ユダヤ人としての性質」を持つとみなされたこの例からは、異教徒としての性質が洗礼によって簡単には消し去れないものであり、それは子孫にまで引き継がれる遺伝的なものとして想像されることがあったという事実を示している。[19] 現実におけるこうした Conversion に伴う困難や、完全な同化の可否をめぐる問題意識は、物語においても同様に描き出されることとなる。本論考の後半において見るように、中世の物語におけるサラセンの物語は、同時代の改宗をめぐる想像を反映したものとして理解することができるのである。

キリスト教の掲げる異教徒への布教という理想が存在する一方で、他者の同化には常に疑いや心理的な障壁が存在したと言える。中世におけるこうした異教徒の同化をめぐる議論については、中世の改宗譚にその枠組みを与えたと考えられる伝説を参照することで、その主だった特徴を確認することができる。John V. Tolan や Siobhain Bly Calkin などの研究者が指摘するように、中世後期の「異教徒の改宗」を扱う物語は、古典的な聖人たちの回心や、異教徒の王の改宗の物語をモデルとしている。[20] 初期キリスト教世界における最も有名な神の奇跡による Conversion の例は、ダマスカスに向かうサウロ（聖パウロ）、あるいは聖アウグスティヌスの回心であろう。教会の迫害者であったサウロはダマスカスへと向かう道中に神の啓示を受け、キリスト教世界の最も重要な改宗者となる。また、自らの過去の振る舞いを悔いたアウグスティヌスによる回心も同様に神の導きによるものであり、世俗的・肉体的な欲望から目を背け、聖なる神に心を向けることとなる。これらの例は「神の導きによって改宗を決意する」という枠組みを後期中世のサラセンの物語に与えることとなる。

一方で、こうした初期キリスト教世界の例においても Conversion は洗礼や特定の出来事によって即座に完了するようなものではなく、その後の信仰の証明や不断の努力を前提にしている。例えばサウロは、自身の突然の改宗を疑う同宗者に向かって、その信仰を示す必要があったと語られている。

> サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。（『使徒言行録』９：26–28）[21]

---

[19] Heng, pp. 77.

[20] John V. Tolan, *Sons of Ishmael: Muslims through European Eyes in the Middle Ages* (Gainesville: University Press of Florida, 2008), p. 67; Siobhain Bly Calkin, *Saracens and the Making of English Identity: The Auchinleck Manuscript* (New York: Routledge, 2005), pp. 122–23.

[21] 『新共同訳聖書』（日本聖書協会、1999）.

またアウグスティヌスの『告白録』では、彼が肉の欲に溺れぬよう自らを律し、常に正しい信仰心を持つよう努力し続けていた様子が描かれている。

> それゆえ、わたしはこのような誘惑のなかに置かれ、食べ物と飲み物の欲望に対して日々戦っています。じっさいこれは、丁度肉の交わりについて出来たように、きっぱり断ち切り、二度と触れまいと決心出来るようなものではないからです。(『告白録』X. xxxi（47))[22]

Rambo が指摘するように Conversion は常にその真正さを証明することが困難なものであり、[23] こうした初期キリスト教世界における聖人の例は、洗礼を受け共同体に参入した個人の「信仰の証明」の必要性を示している。またこの点は、現実の教義において示される「洗礼の秘跡は信徒の信仰心を保証する訳ではない」という考えとも合致する。中世イングランドにおけるこうした理解を示す一例を、Geoffrey Chaucer の教区司祭の言葉の中にも見ることができる。'For, certes, if he baptized withouten penitence of his olde gilt, he receyveth the mark of baptesme but nat the grace ne the remission of his synnes, til he have repentance verray' (*Parson's Tale* 97). ここで示されるように洗礼の秘蹟（Baptism）は真の悔恨を伴わなければ、形だけのものとしてその効果を発揮することはないと考えられていたのである。

Daniel が指摘している様に、洗礼をすでに受けている個人の Conversion は、それまでの信仰を捨て、新しい信仰体系を受け入れるというサラセンの改宗とは異なるものである。一方で Conversion とは異教徒の改宗だけではなく、堕落したキリスト教徒による真の神への回心も範疇に含む用語であり、異教徒がキリスト教徒となる改宗に加えて、正しい道から外れたキリスト教徒がこれまでの自らの罪を認め、神に心を向ける過程をも表すことができるものでもある。[24] 本論において重要なことは、いずれの例においても、'Convert' は自らの新たに獲得されたアイデンティティを証明することが求められるという点である。初期キリスト教世界における回心の物語は、改宗者は常に自らの信仰の正しさを証明するために不断の努力を期待されるという雛形を、のちの異教徒の改宗譚に提供することになる。ここで描かれる信仰の証明のプロセスはキリスト教徒とサラセンの戦いや改宗を描く物語においても確認することができる。本論考の後半では後期中世イングランドで作られた二つのサラセンの騎士の改宗譚を扱いながら、物語において語られる異教徒による信仰の証明のプロセスを確認していく。

---

[22] アウグスティヌス『告白録（下） アウグスティヌス著作集５／II』宮谷宣史訳（教文館、2007）.

[23] Lewis R. Rambo, *Understanding Religious Conversion* (New Haven, CT: Yale University Press, 1993), p. 5.

[24] *MED* s.v. 'conversioun', meaning 1a, (a) and (b): '(a) Conversion to a religious belief, esp. to Christianity; (b) conversion (of a heretic or sinner) to the true faith, or to virtuous or holy living.'

3.「他者化」のプロセスと境界の再定義：Otuel の改宗と信仰の証明

初期キリスト教世界の聖人の物語同様に、後期中世の異教徒の改宗譚においても洗礼が常に全てのゴールとなるわけではなく、改宗を決意した個人はその後の自らの言動を通して、存在を証明することが期待されている。Daniel は武勲詩（Chansons de Geste）における Conversion を「一瞬の出来事」として論じたが、洗礼に続く信仰生活の性質を踏まえれば、神に心をむける Conversion は短時間に起きる変化ではなく、長いプロセスを指す物であると考えることができる。物語中におけるサラセンは通常、こうした信仰の証明をかつての仲間を相手にキリスト教徒を守るために戦うことによって実現する。洗礼に続く秘蹟であり、信徒の信仰を確かめる堅信の秘蹟（Confirmation）における「悪魔や罪、異教徒と戦う」というイメージは、物語中で悪を象徴するサラセンとの戦闘と、親和性の高いものであるといえる。

> For in baptism power is received for performing those things which pertain to one's own salvation in so far as one lives for himself. In confirmation a person receives power for engaging in the spiritual battle against the enemies of the faith. […] The spiritual combat against unseen enemies is the task of all. But *the battle against visible enemies, that is, against persecutors of the faith, is the work of those who have been confirmed*, who have already attained spiritual manhood. (*Summa Theologiæ*, 3a. 72, 5, my emphasis)[25]

信仰の敵との戦いは同時に、改宗者たちがかつての自分自身である「異教徒」と現在の自らの姿を全く異なるものとして区別する働きを持っている。戦いを通してキリスト教徒と明確に異なる他者を定義することで、改宗者は自分が「他の異教徒とは異なる」という点を周囲に示すのである。このように、物語において信仰の真摯さを疑われるサラセンの改宗者は、自らの言動によって自己と他者の違いを明確なものとする「差異化（他者化 *Othering*）」のプロセスに積極的に参与することが求められる。[26] 本セクションでは、中英語で書かれたシャルルマーニュの物語のうち、Fillingham 写本に収録された『オテュエルとロラン』*Otuel and Roland* を中心に、サラセンの改宗者が自らの信仰を証明する際に求められる「他者化」のプロセスを確認する。[27]

サラセンの騎士の同化を題材とするシャルルマーニュロマンスの一つである Otuel の物語

[25] Thomas Aquinas, *Summa Theologiæ: Baptism and Confirmation (3a. 66–72)*, trans. by James J. Cunningham, vol 57 (Cambridge: Cambridge UP, 2006).

[26] 'Othering' の使用については Alan S. Ambrisco, 'Cannibalism and Cultural Encounters in *Richard Coeur de Lion*', *Journal of Medieval and Early Modern Studies*, 29（1999）, 499–528（p. 510）を参照。Ambrisco は、「近接しており（'proximate'）」、そのために「存在論的に危険な存在となる他者（'epistemologically dangerous other'）」を「完全に異なる他者」に変えることで、自己と他者の違いを明確に示すプロセスを 'Othering' と呼んでおり、この用語をリチャード一世の事績を扱う年代記を対象にした研究において用いている（pp. 509–10）.

は現存する三点の写本に収録されており、それぞれの写本に残る物語は細部やその長さにおいて違いはあるものの、物語の大筋は共通している。[28]

【あらすじ】サラセンの騎士であるオテュエル（Otuel）は、シャルルマーニュの騎士の一人であるロランと一騎討ちをする。戦いの中で、神の奇跡によりオテュエルは洗礼を受けることを決意し、シャルルマーニュの騎士の一人となる。新たにオテュエルを加えたシャルルマーニュ率いるキリスト教徒の一団はスペインのサラセンとの戦闘に勝利する。その後、オテュエルはシャルルマーニュの娘であるベルサン（Belisand）と結婚し、物語は幕を閉じる。（現存する写本のうち、本論で扱う Fillingham 写本では、続く遠征の様子、Rouncevalles での壊滅的な被害、裏切りものであるガヌロン（Ganelon）の処刑を描いたセクションを含んでいる。）

オテュエルの物語は現存する多くの中英語シャルルマーニュロマンス同様、異教徒の改宗を主題としており、他者によるキリスト教共同体への同化の過程を描くものとなっている。この物語において、主題となるサラセンの騎士の改宗は、神の奇跡によって導かれたものとして描かれ、主人公であるオテュエルはキリスト教徒であるロランとの一騎打ちの最中に、聖霊の導きによって改宗することを決意している。

the holy gost thoruȝ here alder prayer
a-lyȝt apon that Sarasin there
thoruȝ goddys holy myȝt
tho sayd the messanger,
‘leue Roulond, come me ner,
y haue for-lorne my fyȝt.
Mahoun & Iouyn, y wil for-sake,
and to Ihesu crist y wyl me take,
to bene hys knyȝt.’
(*Otuel and Roland* 566–77)

キリスト教徒と異教徒の対立を描く物語の中で、改宗は同時に政治的・社会的所属の変更を表すものであり、改宗者には敵味方の両方から疑いの目を向けられることとなる。キリスト

[27] *Otuel and Roland* in *Firumbras and Otuel and Roland*, ed. by O’Sullivan. この物語に対する考察の一部については、拙論 JO Thae-Ho, ‘The Performativity of Racial-Religious Identity: The Representation of Saracens in Middle English Romances’, *Études Médiévales Anglaises* 95（2020 for 2019）, 7–40（pp. 21–26）を参照のこと。本論考では、宗教的アイデンティティの変更としての Conversion に焦点をあてながら、JO（2020）の議論を発展させている。

[28] 現存する三つの写本は以下の通りである：*Otuel* in the National Library of Scotland, Advocates’ MS 19.2.1 (the Auchinleck MS); *Otuel and Roland* in British Library, Additional MS 37492 (the Fillingham manuscript); the *Romance of Duke Rowland and Sir Otuell of Spayne* in British Library, Additional MS 31042 (the London Thornton manuscript).

教徒による「裏切り」に強い懸念を示すシャルルマーニュの物語においては、こうした改宗する騎士の決断は何らかの手段で正当化される必要がある。このロマンスにおいては、先の『ターズの王』と同様に、神の奇跡によって騎士の決断が正当なものとして示され、その同化はあたかも完全なものであるかのように描かれている。

サラセンの騎士による同化が完全なものであることを示そうとするかのように、オテュエルの洗礼の直後には、新たにこの改宗者を加えたキリスト教徒の一団の様子が描かれている。

ther was *Rowland, and Olyuer,*
and syr Otuel, and Oger,–
In hert ys nouȝt to huyde,–

Esteryche of langares, and syr turpyn,
Archel, Etus, & syr Geryn,
Nemes, and syr Reyner.
(*Otuel and Roland* 647–52, my emphasis)

洗礼を受けたサラセンの騎士がキリスト教徒の一団に名を連ねるこの場面は、サラセンの改宗者を新たに迎えて入れた理想的な騎士たちの姿を描き出している。このイメージはまた、ロランが決闘中にオテュエルに向かって描いてみせた、騎士同士の連携の様子とも一致する。

'And *thou, and I, & Oliuer*
Mowen wende to-gedyr in fere
In-to batayle and in-to fyȝt.
ne schulle we fynde in no londe
None that schall vs withstonde,–
neythyr kyng ne knyȝt.'
(*Otuel and Roland* 515–20, my emphasis)

しかし、この物語におけるその後の展開は、このサラセンの騎士の同化が洗礼によって完成したわけではないことを示している。オテュエルの洗礼の直後には、キリスト教徒の騎士の冒険の様子が語られるものの、先の引用箇所と比較すると、この場面におけるオテュエルの不在が明らかとなる。

'Nowe here bygynnyth A batayle,
fful fel to founde samfayle,
Off *thre goode dussypers,*
Rowlond, Olyuer, and Oger,–

ffor-sothe, yt were knyȝtes sampyr,
y-preued in many contres!–
howe they slowe vndyr a forest,
kynges thre, that were full prest.
(*Otuel and Roland* 662–69, my emphasis)

ここで語られるロラン、オリヴァー、オジエルの三人の騎士は、先の引用箇所において同一スタンザ内でオテュエルとともに名を連ねていた騎士であり（647–48）、結果としてこの場面における「オテュエルの不在」を際立たせている。かつてユダヤ人だった個人が洗礼を受けた後にもユダヤ人としてみなされることがあったように、オテュエルは依然として「かつてサラセンであった」という事実による他者性を消しされてはいないということが示唆されているのである。

同様にオテュエルはシャルルマーニュの娘ベルサンとの結婚を勧められた際にも、かつての主君であったガーシー（Garcy）が率いるサラセンを葬るまでは彼女と結婚しないと主張する。

‘whenne thou hast that londe y-nome
and all the sarasins ouercom,
And y-slawe kynge Garcye,
thenne woll we be spousyd, y-wys.’
(*Otuel and Roland* 620–23)

先の『ターズの王』においても確認したように、異教徒を含む「他者」との結婚は忌避されるものであり、このオテュエルの判断は「完全に同化されるに至ってはいない」という事実を反映したものと考えることができる。このオテュエルの例は、先述の『ロランの歌』において示唆された「信仰を変えれば同化される」という単純化された構図を覆すものであるといえる。同時に、「元の主君であったサラセンの王を亡き者にするまで」というオテュエル自身の提案は、彼の信仰の証明が他のサラセンとの戦いを通してこの物語中で実現されるということを予見している。神の奇跡や洗礼の儀式にも関わらず改宗者が疑われるという事実は、宗教的アイデンティティは意志によって簡単に変更できるものではなく、特定のプロセスを通して証明されるべきものとして扱われていたということを示している。

かつて異教徒であった改宗者は、こうした疑いに直面した際、自らと異教徒の違いを明確に示し、自分以外の異教徒を完全な「他者とする」ことで、新たに獲得されたキリスト教徒としてのステータスを証明する。オテュエルの物語においてこの「他者化」のプロセスを端的に示すのは、キリスト教徒となったオテュエルとサラセンの王クラレル（Clarel）との戦いである。洗礼前のオテュエル同様に優れた王として描かれるクラレルであったが、オテュエルの一撃はクラレルの美しい顔を、歯をむき出しにした「犬の様な姿」に変えてしまう。

he smote hym on the helme anone,

that a quarter of hym away gan gone,
bothe hys schelde and hys berde.
ffor-sothe the boke wytnesseth,
that *men myȝt sen hys tethe*,
bothe lewed & lered.'
(*Otuel and Roland* 1458–63, my emphasis)

彼の表情と「犬（'hound'）」との類似は、傷を負ったクラレル自身の嘆きの言葉にも表されている。

'Alle the world in lengthe and Brede
Schal me skorne a-plyȝt.
"None fayrer knyȝt myȝt by founde,
And now *he grennez as an hounde*,
Both day and nyȝt"'.
(*Otuel and Roland* 1492–96, my emphasis)

「異教徒の狗」という蔑称が表す様に、サラセンは典型的に犬のイメージと結びついており、[29] クラレルのこの描写は、「美しい異教徒の王」から典型的な「異教徒の狗」への変身として理解することができる。オテュエルは戦闘を通して、自らと同じく優れた騎士であったサラセンの王を、典型的な異教徒の姿とすることで、自らと「異教徒の狗」との境を明確にし、キリスト教徒としての自らのアイデンティティを証明しているのである。

異教徒とキリスト教徒の線引きが曖昧なものとして提示される時、物語は暴力的にこの違いを再定義しようとする。[30] 洗礼の後に続く、同宗者からの疑いや、もとの仲間であるサラセンとの戦いの過程を合わせて見れば、こうした展開がキリスト教へと改宗した異教徒の信仰を証明するためのものであることがわかる。ここでオテュエルは実際に彼の「分身（'Double'）」ともいうべき優れたサラセンの王を「怪物的な異教徒」の姿に変えることで、自らを含むキリスト教徒とこうしたサラセンの間の境界を再定義しているのである。改宗に続く、かつての同胞であった他のサラセンとの戦いは、単に聴衆を惹きつけるような盛り上がりを物語に提供するだけではなく、Conversion を確認するための重要な役割を果たしているのである。奇跡によって縁取られた彼の改宗にも Confirmation が必要であるという事実は、宗教アイデンティティは洗礼の有無だけではなく、自身の信仰を示す行動によって表されるべきものとして理解されていることを示してくれる。

キリスト教徒であるガヌロンの裏切りや異教徒の改宗などを重要なテーマとするシャルルマーニュのロマンスは、信仰の証明に強い関心を示す物語であると言える。オテュエルの物

[29] John Block Friedman, *The Monstrous Races in Medieval Art and Thought* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1981), pp. 67–69.

[30] Jeffrey Jerome Cohen, 'On Saracen Enjoyment: Some Fantasies of Race in Late Medieval France and England', *Journal of Medieval and Early Modern Studies* 31 (2001), 113–46 (p. 123).

語では異教徒による信仰の証明に加え、キリスト教徒による棄教への不安も同様に示されている。例えば『オテュエルとロラン』においては、後のキリスト教徒による背信を暗示するようにシャルルマーニュによる「裏切りへの不安」が語られている（2002–2007）。また、ガヌロンの裏切りによって引き起こされた戦いの最中、傷を負い視力を失ったキリスト教徒の騎士オリヴァーが、味方の姿を見分けることができず、仲間であるロランに向かって斬りかかる場面においても、同様の不安が示されている。"'allas," sayde Roulond þo, / "Olyuer, why faryst þu so? / *Artou paynym by-com*?"' (2204–06, my emphasis). キリスト教徒が異教徒へと改宗することを恐れるこのロランの言葉からは、宗教上のアイデンティティは言動によってのみ判断されていたという当時の想像力が垣間見えるのである。[31]

『オテュエルとロラン』において描かれる改宗者への疑いと信仰の証明のための戦いは、Conversion という現象に内在するものである一方で、この物語の中で描き出される信仰の証明と宗教共同体の確固たる定義の必要性は、この物語が作られた歴史的な社会背景を反映したものであると考えることができる。『オテュエルとロラン』が収録された Fillingham 写本はキリスト教の異端の一派であるロラード派の活動拠点であった15世紀中頃のブリストルにて作られている。実際に物語において描かれる様々な描写は異端に対する正統派（Orthodox）の正当性を主張するものでもあり、この物語自体が異端や異教徒の Conversion に強い関心を示したものだと言える。[32] こうした物語が描き出す改宗を達成するためのサラセンの騎士の取り組みは、当時のキリスト教社会における問題を映し出しながら、信仰の証明をめぐる想像力を浮き彫りにしている。

４．不完全な同化と周縁化され続ける騎士：Palomides

中世イングランドで語られたロマンスに登場するサラセンの騎士の多くが、オテュエルと類似した役割（キリスト教を脅かす優れた戦士として登場し、一騎討ちに敗れ改宗を決意、その後は信仰の証明に従事する）を与えられる一方で、15世紀に書かれたサー・トマス・マロリー（Sir Thomas Malory）の『アーサー王の死』*Le Morte Darthur* に登場するサラセンの騎士パロミデスはこうしたサラセンの騎士とは異なる独特の性質を有している。[33] サラセンの騎士でありながらキリスト教徒となりアーサー王が統治する円卓の騎士の一員になることを望むパロミデスは、宗教的アイデンティティの変更に伴う問題に興味深い視点を提供してくれる。

アーサーの生涯を扱った本作の三分の一に相当する「トリストラム卿の物語」で中心的な

[31] 中世においては「盲目」もまた異教徒や異端に特徴的な魂の堕落に起因すると考えられていた。Akbari が指摘したように、異教徒はしばしば「魂において盲目 'spiritually blind'（p. 5）」と考えられていた。またこうした考えについては例えば *Ayenbite of Inwyt* などの中英語で書かれた信仰の手引書にも記されている。Penelope B. R. Doob, *Nebuchadnezzar's Children: Conventions of Madness in Middle English Literature*, p. 22, n. 38.

[32] Phillipa Hardman and Marianne Ailes, *The Legend of Charlemagne in Medieval England: The Matter of France in Middle English and Anglo-Norman Literature* (Cambridge: Brewer, 2017), pp. 200–201.

[33] Sir Thomas Malory, *Le Morte Darthur: The Original Text Edited from the Winchester Manuscript and Caxton's* Morte Darthur, ed. by P. J. C. Field (Cambridge: Brewer, 2017).

役割を果たすパロミデスは、オテュエルや『ターズの王』に登場したサルタンとは異なり、キリスト教徒に敵対する異教徒として描かれていない。彼は信仰の違いを超越するように、騎士階級の価値観を共有する有徳の人物として描かれており、物語中ではキリスト教徒の騎士とともに「世界で最も優れた四人の騎士」の一人として名を連ねている。更にパロミデスは興味深いことに、洗礼を受ける前から心の内ではキリストを信仰していると語り、自らが信仰に相応しい人物であると示すため「７つの戦い（‘seven trew bataylis for Jesus sake’）」をくぐり抜けるまでは洗礼を受けないと誓っている。彼のこの振る舞いは、「内的な信仰は物語において、特定の行動（冒険における活躍）によって示されなくてはいけない」という問題に、興味深い視点を投げかけてくれる。中世の物語に登場するサラセンの改宗者の多くがキリスト教徒である騎士に敗れることで初めて神の力を認め、洗礼の後に自らの信仰を証明しようとする一方で、パロミデスは異教徒の騎士として、洗礼に先立ってキリストへの信仰を証明しようとしているのである。自らの宗教上のアイデンティティを戦いによって証明しようとする彼の思惑は、「信仰は言動によって証明されるべき」というこれまでの議論とも合致するようでもある。しかし、物語の展開を詳細に確認すれば、騎士としての彼の言動がいかに優れたものであり、彼自身の信仰はキリスト教にあると彼がいかに主張しようと、洗礼を受けるまでの彼はキリスト教世界には完全に受け入れられていない「他者」であることがわかる。パロミデスの物語は、キリスト教世界における他者の同化と、共同体の統一・団結を成就することの困難さを示しているのである。

「トリストラム卿の物語」において、パロミデスの勇猛さと活躍は繰り返し語られており、その働きを称賛するキリスト教徒の言葉は彼の性質を肯定的に保証するものであるように見える。しかし、サールースで行われた馬上槍試合のトーナメントにおけるアーサーの発言は、それまでの優れたパロミデスの振る舞いにもかかわらず、彼の非キリスト教徒としての身分を強調するものとなっている。“‘A, Jesu!” seyde Kynge Arthure, “this is a grete dispyte that suche a Sarysen shall smyte downe my blood!’” (524. 12–13). ここでアーサーは、試合においてパロミデスが円卓の騎士を続け様に倒す様子を目の当たりにし、「サラセンによって自らの血族が倒されている」ことを屈辱（‘dispyte’）と述べている。この言葉はサラセンでありながらキリスト教徒と変わらぬ活躍を見せ、キリストへの信仰を口にするこの騎士を「非キリスト教徒」として示し、彼の血族である円卓の騎士とは明確に区別している。優れた騎士として認められながらも、依然としてキリスト教共同体の他者であるパロミデスは、自らの行為によって他の異教徒との違いを証明する必要があることが暗示されている。

騎士道ロマンスにおいて信仰の証明を求められる改宗者が他のサラセンとの戦いによってこれを証明しているように、パロミデスもまたサラセンの騎士との戦いを通して、自他の境界を引き直す「他者化」のプロセスに従事している。パロミデスの役割を考える際に重要なサールースでの馬上槍試合において、彼は、ボーダス王の娘を恋慕うサラセンの騎士コーサブリン卿との戦いを引き受けることになる。パロミデスの名声を耳にした王の娘は、彼女を自分のものとするために悪評を流し、縁談を遠ざけていたコーサブリン卿から自身を救ってくれるようパロミデスに依頼する。こうして二人のサラセンの騎士の戦いは多くのキリスト教徒が見物するなかで執り行われることになる。キリスト教徒を守護するために悪質な異教

徒の騎士と戦うことで、パロミデスは共同体に対して異教徒とは異なる自らの性質を証明することになる。事実、パロミデスが決闘に勝利し、降参することを拒否したコーサブリン卿の首を跳ねた際には、その体から「異臭」が漂う様子が描写されている。

> Than he smote of his hede. And therewithal cam a stynke of his body, whan the soule departed, that there myght nobody abyde the savoure. So was the corpus had away and buryed in a wood, bycause he was a paynym. (526.34–527.2)

死後の身体に生じたこの変化は彼が異教徒であったという事実（'he was a paynym'）と結びついていることが示唆されており、この人物の排除はパロミデスとの違いを明確に示すものとなる。同じくサラセンであった彼は、異教徒である敵を「明確に異なる存在」に「他者化」することで、自らのアイデンティティを規定していると考えることができる。実際に彼はこの直後、自らの信仰を明確に表現している。

> 'Sir,' seyde Sir Palomydes, 'I woll that ye all knowe that into this londe I cam to be crystyned, and in my harte I am crystynde, and crystynde woll I be. But I have made suche a vowe that I may nat be crystynde tyll I have done seven trew bataylis for Jesus sake, and than woll I be crystynde. And I truste that God woll take myne entente, for I meane truly.' (527.11–16)

死後に異臭を放ち、異教徒として堕落した魂を持つものとして描かれたコーサブリン卿と自らの違いを明らかにしながら、パロミデスは自らの信仰をキリスト教徒に向けて示しているのである。

一方で興味深いことに、パロミデスは異教徒との他者化を終えた後にも依然として洗礼を受けることを先延ばしにしている。内心ではキリスト教を信仰しながらも異教徒としてとどまったという事実は、後の物語で語られるように、彼自身の信仰を証明する取り組みにおいて重大な障壁となる。アイデンティティの証明をめぐって、彼が依然として異教徒であることが問題となるのは、後の馬上槍試合の中で彼が身分を隠す場面においてである。パロミデスは恋敵であるトリストラムへの嫉妬心から、自らの所属を隠し、銀の鎧を身につけ、同じく身分を隠しながら黒い鎧をまとったトリストラムと対峙する。[34] 普段とは異なる装いから、この場面においてこの二人がキリスト教徒のトリストラム卿とサラセンのパロミデスであると特定できるものはいない。こうした変装による passing/disguise は、アイデンティティがパフォーマティブなものとして想像されているということを明らかにしてくれるものであり、黒い色が典型的にはサラセンを表すものであったことを考えれば、異なる集団を象徴的に示す要素の交換は、アイデンティティの特定にかかわる曖昧さと困難さを示す興味深い例として見ることができる。

一方で、本論において重要となるのは、ここでは二人の騎士が同様に変装をしているにも

[34] Donald L. Hoffman, 'Assimilating Saracens: The Aliens in Malory's *Morte Darthur*', *Arthuriana* 16 (2006), 43–64 (p. 52).

関わらず、戦いを見守っていた王妃イゾードによってパロミデスの変装のみ ‘treson’ という言葉で侮蔑的に語られているという事実である。‘And Quene Isode was lad unto her pavelons, but wyte you well she was wrothe oute of mesure with Sir Palomydes, for she saw all his treson frome the begynnyne to the endynge’ (595.1–14). Schwartz の洞察によればこの違いは二人の宗教的なアイデンティティの違いに根ざしており、ここではキリスト教の騎士が身分を偽ることは許容される一方で、サラセンによるそれは ‘treson’ としてみなされている。[35] 信仰心の有無に関わらず、特定の振る舞いによって自身のアイデンティティを示すことができるとすれば、異教徒による「なりすまし」は、キリスト教世界にとって潜在的な脅威となる。[36] 信仰の証明を問題にする中英語ロマンスにおいて、キリスト教徒によるなりすましは許容される一方で、異教徒によるアイデンティティの偽称は忌み嫌われるという事実は、改宗者がキリスト教徒に同化する際に伴う困難と同質の問題を孕むものであると言える。パロミデスは、異教徒との違いを自ら示したにも関わらず、依然としてキリスト教徒にとって「曖昧な他者」として扱われており、そうした異教徒による変装は危険な「非難すべき裏切り」として理解されるのである。オテュエルが洗礼後に自らの信仰を証明する必要があったのとは対照的に、いかにキリスト教徒として適切な振る舞いをしようとも、サラセンであるパロミデスは依然として疑いの対象として扱われているのである。洗礼は宗教共同体へ参入するための第一歩となるものであり、[37] 内的な信仰を証明するための行為はあくまでも洗礼によるキリスト教徒としての公的な身分を前提とするものであるということがここでは示されている。

パロミデスは「トリストラム卿の物語」の結末となるトリストラムとの戦いの果てに洗礼を希望し、晴れてキリスト教徒の身分を手にすることになる。

> Than the suffrygan let fylle a grete vessel wyth watyr, and whan he had halowed hyt he than conffessed clene Sir Palomydes. And Syr Trystram and Sir Galleron were hys too godfadyrs.
>
> And than sone afftyr they departed and rode towarde Camelot, where that Kynge Arthure and Quene Gwenyvir was, and the moste party of all the Knyghtes of the Rounde Table were there also. And so the kynge and all the courte were ryght glad that Sir Palomydes was crystynde. (663.31–664.1)

彼の優れた武勲を知る円卓は歓喜して彼を受け入れており、ここでパロミデスの改宗は、『ロランの歌』において描き出されていた単純化された図式に則った、完全なものであるかのように描き出される。しかし、洗礼を受けたパロミデスのその後の運命は、単純な「他者

---

[35] Caitlyn Schwartz, ‘Blood, Faith and Saracens in “The Book of Sir Tristram”,’ in *Arthurian Literature* 28 (2011), 121–35 (p. 130).

[36] 実際に古仏語版ではパロミデスは実際の信仰心とは別にキリスト教徒であるかの如く振る舞っている。Schwartz, pp. 126–27.

[37] ‘Baptism is called the *sacrament of faith* because it involves a profession of faith and joins those who receive it to the congregation of believers’ [emphasis in the original] (*Summa Theologiæ* 3a.70.1).

の同化」の完成を示してはいない。物語の元となった古仏語のヴァージョンと比較すると、ここでマロリーがパロミデスの改宗をめぐって、興味深い調整を行っていることが明らかになる。13世紀ごろに書かれたとされる古仏語の『散文トリスタン』The French Prose *Tristan* において、優れた騎士であったパロミデスは洗礼を受けるものの、キリスト教徒として受け入れられることはなく、彼の改宗の事実を知らない円卓の騎士の手にかかって命を落としてしまう。[38]『散文トリスタン』においてはパロミデスが洗礼を受けた後にキリスト教徒によって排除されていることから、この物語ではキリスト教共同体へ同化しようとする異教徒に対する排他的な態度が示されていることがわかる。一方で、マロリーの『アーサー王の死』において洗礼を受けたパロミデスは命を奪われることはない。「トリストラム卿の物語」が幕を降ろした後に、彼は物語の本筋から退場し、極めて周縁的な役割を与えられることになる。自他の曖昧な境界の上に存在する異教徒として際立った役割を与えられていたパロミデスは、後の物語においてその存在感を失い、あたかも他のキリスト教徒同様の信徒の一人となり、共同体に完全に同化しているように見える。（洗礼とその後の信仰の証明を終え、キリスト教徒の女性と結婚したオテュエルが、その後の物語の後半において極めて存在感の希薄な役割を充てがわれていることも、彼の同化が成功裡に進んだ結果であると言える。）しかし、マロリーの物語におけるその後の行方を検討すると、キリスト教徒に受け入れられていたように描かれたパロミデスが、依然としてキリスト教世界における「他者」であり続けたことがわかる。

『アーサー王の死』においてパロミデスは洗礼を受ける前から「吠える獣（‘the Questynge Beste’）」を追い求める冒険に従事していることが繰り返し語られており、先の引用で確認した洗礼の場面の直後にもこの冒険に出ることが言及されている。奇妙なことに、この一文は、円卓の騎士たちが聖杯の探求のため旅に出ていくという説明と前後して語られている。

> And at that same feste in cam Sir Galahad that was son unto Sir Launcelot du Lake, and sate in the Syge Perelous. And so therewythall they departed and dysceyvirde, all the Knyghtys of the Rounde Table. And than Sir Trystram returned unto Joyous Garde, and *Sir Palomydes followed aftir the Questynge Beste*. (664.2–8, my emphasis)

『アーサー王の死』の中で繰り返し言及される「獣」を追う冒険を自ら選択したパロミデスは、キリスト教徒の一団に加わって冒険に従事することはないことがここで示唆されている。『アーサー王の死』では、パロミデスの選んだ「獣」を追い求める冒険を成就できるのはペリノア王、あるいは彼の近親者のみと語られており、パロミデスは血縁の点からも達成する見込みのない旅をあてがわれていることがわかる。[39] この読解は、サラセンの騎士パロミデスによる「キリスト教世界への同化」という問題を理解する際に極めて重要な示唆を与

[38] Silvia Huot, ‘Others and Alterity’, in the *Cambridge Companion to Medieval French Literature*, ed. by Simon Gaunt and Sarah Kay (Cambridge: Cambridge UP, 2008), pp. 238–50 (pp. 245–50); Sue Ellen Holbrook, ‘To the Well: Malory’s Sir Palomides on Ideals of Chivarlic Reputation, Male Friendship, Romantic Love, Religious Conversion – and Loyalty’, *Arthuriana* 23 (2013), 72–97 (p. 91).

えてくれる。かつてサラセンの騎士であったパロミデスは、その美徳と信仰心にも関わらず、洗礼の後にも周縁的な存在として、決して同化を成し遂げることができなかったと考えることができるのである。キリスト教徒としての究極的な冒険であり、円卓の騎士の崩壊を導くことになる聖杯の探求であるが、かつてサラセンの騎士であったパロミデスは、この試練に不適格であることを示すように、決してその輪に加わることはない。

アーサーの率いるキリスト教世界への参入が不十分に終わっているという点を更に補強するように、その後のエピソードにおいてパロミデスが再び登場した際にも彼はアーサーと対立するランスロット（Lancelot）に付き従っている。アーサーがサールースの戦いにおいて自らの血縁がパロミデスによって倒された際に彼の異教徒としての身分を蔑んでいたことを加味すれば、この描写はアーサー王の宮廷にパロミデスが完全に同化されることはなかったということの証左として理解することができる。[40] 対照的に、パロミデスは洗礼を受ける前から「ランスロットの血縁のものとは敵対しない」ことを誓っており、アーサーとランスロットの対立が激化した際には「アーサー王の血縁」を非難している。[41] アーサーの宮廷が彼の血縁であるオークニーによって体現されているとすれば、物語後半においてそれと敵対するランスロットに従ったパロミデスは、アーサー王の宮廷に完全に同化することはなかったと考えることができる。キリスト教の騎士から構成される円卓への同化が達成されなかったという事実は、彼の他者性は洗礼を受けたという事実だけでは解消されないものであったということを示唆している。[42]

こうした異教徒の同化をめぐる想像は、異教徒に対するキリスト教世界の団結を謳った十字軍的な理想が過去のものになりつつあった中世後期のイングランドにおけるキリスト教世界の不安を反映したものとして理解することができるかもしれない。『オテュエルとロラン』が同時代の異端への不安を示していたように、マロリーが物語を描いた15世紀のイングランドにおいては異端をめぐる問題が苛烈化しており、洗礼を受けキリスト教徒となったパロミデスが依然として円卓から奇妙にも排除され続けたという事実は、宗教共同体内部における分裂を示唆するものとして理解することができる。Schwartz は、物語中におけるパロミデスの言葉からもこうした問題を読み取ることができると指摘している。

> Palomydes' religious experience evokes the Wycliffite idea that the visible community of the church is not equivalent to the community of the saved, as when Palomydes tells Sir Helyus and Sir Helake, "I shall dye a bettir Crystyn man than ony of you bothe (425)".[43]

---

[39] Schwartz p. 131. Schwartz は、パロミデスの「獣」を追う冒険を描写する際に用いられている動詞 'followed aftir' から、この冒険が成就する見込みのないものとして示されていると指摘している。

[40] Christine Pyle, 'Sacramental Unity for a Saracen: Malory's Conflicted Knight Palomides', *Arthuriana* 27 (2017), 22–38 (pp. 33–34).

[41] Holbrook, p. 92.

[42] Huot, p. 249.

[43] Schwartz, p. 129.

同じくキリスト教徒である二人の騎士に対して、「より立派なキリスト教徒として」自らを位置付けようとするパロミデスの言葉は、洗礼を受けたにもかかわらずその美徳や信仰心において「十全とは言い難い信徒」の存在を暗示している。パロミデスの物語は洗礼によるキリスト教徒としての身分の重要性を示す一方で、宗教共同体の内部にある異質な存在を仄めかし、共同体の統一を簡単には成就されないものとして描きだしているのである。

５．おわりに

ここまで見てきたように、宗教的アイデンティティを明確なものとして可視化しているように見える中英語ロマンスにおいても、個人の信仰の証明は常に困難を伴うものとして描き出されている。後期中世に人気を博した異教徒の改宗譚の中で、改宗を決意したサラセンの騎士は常に疑いの目に晒され、神の導きや洗礼に続く「新たに獲得された自身の信仰を証明するための戦い」に身を投じることを余儀なくされる。[44] こうした他者の改宗と同化にまつわる困難は中世ヨーロッパ世界における、改宗と信仰をめぐる問題の一端を映し出している。中世の改宗譚は、初期キリスト教世界における異教徒の改宗や道を踏み外した信徒の回心と、その後の戦いをモデルとしている。異なる Conversion が物語においては同様のプロットを持つという事実は、サラセンの改宗の物語は「異教徒の改宗」を語る一方で、その信仰の証明の「過程」は異教徒の改宗にのみ限定されるものではないということを示唆している。こうした視点は、サラセンの改宗を描く物語は読者であるキリスト教徒に、「信仰の証明は自らの言動を通してのみ示される」という教訓を与えるものであったという可能性を示してくれる。サラセンの改宗譚に内在するメッセージは、対外的にはスコットランドやフランスなどの外敵に対して明確に自らを定義し直し、国内では異端など道を踏み外したキリスト教徒と直面していた後期中世のイングランドにおいて、重要な意義を持つものであったと考えられるのである。

（2021年10月31日受理，11月16日掲載承認）

[44] Anna Czarnowus, *Fantasies of the Other's Body in Middle English Oriental Romance* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2013), p. 23: 'Even when conversion happens and the culturally different characters get politically involved on the side of the Westerners, they are continually externalized, at least to a certain extent'.